

米国南北戦争期における奴隷制度 —その宗教的、思想的背景の一考察—

97E125 吉田真子

はじめに

わずか200年の歴史でしかないアメリカは異なる民族、人種によって形成され、自由、平等、民主主義の思想と共に西欧的価値、文化を持つ強国として発展し、今や経済的、軍事的、政治的に一大覇権国家となるに至った。

アメリカ国民にとって、独立宣言における生命、自由、幸福の追求は、権力から守られるべき基本的人権であり、個人の自由と社会の公的共同生活を尊重する統合の文書として機能を高めた。同時に、それは神の摂理と関わりを持つ指導的理念として築き上げられた。

1991年に冷戦構造が崩壊し、東西冷戦という重しが取れたことにより、民族紛争、局地紛争が世界各地で生起するようになった。一方、信じられないことに、本論で若干触れて行くが、現代においても奴隷の存在が報告されている。私は完成したと言われるアメリカの奴隷制度を調べると同時に、それに関する宗教、思想などを考察し、私自身の認識を深めて行きたい。

ところで、奴隷制廃止運動の原因については二つの考えがあると言われている。一つは、神を恐れない奴隷主⁽¹⁾に対して信仰的集団が宗教心、道徳心によって勝利を取めた、という考えである。もう一つは、経済的利害を重視する見解である⁽²⁾。私はむしろ前者より、後者の見解を取りたい。なぜなら産業化とその発展につれて人々が利益、自由を求めていくようになり、功利主義に基づく自由労働イデオロギーが奴隷制廃止運動に対して決定的だったと思うからである。

本稿では、I. 米国における最初の植民地と奴隷制度、から順次、II. 18、19世紀の米国社会状況の特徴、III. 南北戦争の契機と労働思想、IV. 奴隷制と宗教的、思想的関係を考察する。

I. 米国に於ける最初の植民地と奴隷制度

1. 奴隷とは

『掠奪の法観念史』⁽³⁾によると、アウグスティヌスは「もちろん、奴隷状態が課せられたものは、罪あるものに対してであると考えるのは正当である。……つまり、奴隷という名は罪の産物であって、自然がもたらしたものではない。そもそもラテン語の奴隷という言葉の起源は、勝者が戦争の法（*ius belli*）によって殺し得た者達を救った時に敗者が奴隷となったことに由来すると思われる。つまり、奴隷（*servus*）は、救わるべし（*servandum*）という言葉から来ているのである。」と奴隷の存在は人間の罪の為せる業だと罪の観点から正当化している。トマス・アキナスも彼と同様に戦争捕虜の奴隷を正当だと明記している。つまり、戦争捕虜の奴隷化は生命の救出を意味するから許容されるという共通の認識があったのである。奴隷制の正当化は残虐な行為ではなく、人道的で慈悲的処分を意味すると考えられる。その後、「命は救われた（*servatae*）」を「奴隷として連れ去られた」と解釈される⁽⁴⁾。一方、オドフレドゥスはキリスト教は互いに仲間であるので捕虜を奴隷としてはならない、とキリスト教徒の捕虜

の奴隷化を否定した。そして彼等の影響を受けたキリスト教はキリスト教徒の奴隷化を禁じ、13世紀半ば以降それは存在しなかった⁽⁵⁾。更にジャン・ボダン、捕虜の奴隷化は悪事以外の何者でもないとは断定した。

2. 黒人奴隷制度の成り立ち

イギリスが北米で最初に成功した植民地は、ジェームズ・タウンで、1607年であった。入植は清教徒によって行われ、地名は当時の英国国王ジェームズ一世に因んで付けられた。その後ピルグリム・ファーザーズと呼ばれる清教徒達が、1620年プリマスに植民する。更に、その後様々な宗派が移り住んだが、全般的な空気は清教徒的であった⁽⁶⁾。

しかし、入植は1607年よりも早く、1587年で今のノースカロライナにあるロアノーク島に100人余りのイギリス人が家族ぐるみで入植したのが最初であった。その後も入植は続いたが必ずしも順調であったわけでもなかった。人口が激減するなど困難を極める事となるが、この危機を救ったのがタバコの栽培であった。その後、1619年に巨大なオランダ船が20人の黒人を乗せ、当地に立ち寄った。この船は西インド諸島へ向けて送り出された「黒い積荷」をスペイン船から奪い取ったものであり、その20人の黒人は乗組員の食糧と交換された。当時のジェームズ・タウンはまだ経済的蓄積が不十分の為、制度として奴隷を持てなかった。従って彼等は自由な労働者として買われたのであって、5年間働けば自由の身分となれたのである。

事実、彼等は植民地の一員となったり、土地を購入したりして、20人の内15人は年季後ジェームズ川沿いの土地で小作農として生活した。このジェームズ・タウンを契機として発展したヴァージニア植民地はやがて全植民地の指導的役割を果たして行くのであった。タバコの葉は高値でヨーロッパに売り付けることができ、土地は急激に拡大できたのでタバコプランテーション経営者が頭を悩ませることといえば唯一労働力の不足であった。

彼等が最初に労働力の対象として考えたのが先住民であったが、先住民の土地に後から土足で踏み込んできた植民者が彼等先住民を労働力として使用するのには初めから不合理であった。土地を取り上げた上に、働けとは言い難いからである。そのため、本国イギリスから追放された浮浪者や囚人が対象となって、ヴァージニアとメアランドには一時かなりの人間が送り込まれた。しかしそうであっても労働力の供給を上回る生産の増大により、労働力不足の解決とはならなかった。

次に対象となったのが年季契約の労働者であった。これはアメリカで5年、もしくは7年労働に従事するという制度であったが、ヴァージニアでは1670年頃、この白人の契約労働者の数が黒人奴隷の約3倍にもなっていた。その後、ヨーロッパのタバコ需要は益々増加し、プランテーションの拡大は容易であったが依然として労働力不足が続いた。その解決のために植民地人が最終的に選択したのはアフリカから次々に奴隷船で運ばれて来る黒人達であった。こうしてヴァージニアは1661年という早い時期に動産奴隷制度を合法化した。一方、マンハッタン島の南端のニューアムステルダムをニューヨークと改名したイギリス人は、翌1665年に奴隷制度を公認する法律を制定した。

独立直後の1790年に行われた第一回国勢調査の結果では、ニューヨーク市の人口がようやく33,131人となった。うち3,262人が黒人、内訳は奴隷が2,184人、自由な黒人が1,078人で自由黒人の比率の高さもこの町で際立っていた。

北部、ボストンに初めて黒人が着いたのは1638年で、ロードアイランドやコネチカットの植

民地建設には初めから黒人が参加した。北部には多くの奴隷貿易業者が集まり、貿易は盛んになっていたが、彼等はアフリカから黒人を北部へ運ぶよりもむしろカリブ海周辺の西インド諸島か南部の植民地へ運ぶことを考えた。奴隷の需要がアメリカ大陸で益々高まってくると植民地の業者は大いに活気づき、この時代の三角貿易はボストン、セイラム、プロヴィデンス、ニューロンドン等が出発点として大いに賑わった。こうして大西洋岸のイギリス植民地全体に動産としての奴隷制度が確立していった。植民地の推定人口と奴隷の合法化の年代はそれぞれ表1のとおりである。アメリカでは前述の様々な経緯で植民地が形成され、奴隷制が確立していった。

3. 黒人奴隷の日常生活

ここで黒人奴隷の衣、食、住等について簡単に触れておきたい。アフリカの各地から狩り出された奴隷達は、「自分が自分自身である事を確かめる最も身近な証しであった貴い身分を象徴する誇り高い衣服」を剥がされた⁽⁷⁾。プランテーションでの奴隷の衣服は粗末なものであった。植民期、カロライナの米作プランテーションでは、夏には男性は腰巻一つ、女性は簡単なペチコートのような腰巻、子供はたいがい丸裸で一日を過した。衣食住どの分野においても奴隷主がすべて決定していた。その後各種奴隷法⁽⁸⁾が奴隷の衣料水準の最低限を保証する一方でその最高限度も制限していた⁽⁹⁾。南北戦争時代には男性はズボンと木綿シャツ、女性は「ソフト」と呼ばれたシュミーズと上掛けを着た。

挽き割トウモロコシと塩漬けの豚肉が奴隷の食生活を代表する二種の基本的食物であった。食資源が豊富な時は、奴隷達は狩りで得た鳥類や果物、野菜、魚など栄養価の高い食物を与えられた。大きなプランテーションでは奴隷への食生活は行き届いており、時代を下るほど奴隷達は多くの食物を得たようである。しかし、このことは後の奴隷制擁護論者が奴隷制度を正当化する論拠の一つともなった。奴隷主がほんの二、三人を持つだけの小農民の場合は、小麦粉パンや菓子類は決して与えられず、差別待遇は至る所で見受けられた。

奴隷の住まいは掘って建て小屋であった。植民期には家畜小屋同然のものが多く、南北戦争直前の綿花プランテーションでは、家族が離されて売られ、見知らぬ奴隷同士が何人も同居させられる例がまれではなかった。ルイジアナ州の大プランテーションでは、奴隷居住区は主人の館から少しはなれた場所にあり、畑へ通じる道の両側に並んでいた。粗末ながらも衛生的であることが心掛けられていた。

黒人学校が1801年にボストンで建設されると彼等は必死に読み書きを学んだ⁽¹⁰⁾。しかし、学校の建設よりも早くからキリスト教の教義や教会は黒人の教育に関与していた。聖書に従って物を考え、信心深い生活に励むことは奴隷制への従順、忠誠心を養うのに都合がよかったのである。旧約にも新約にも奴隷制反対と奴隷制擁護論が混在しており、プランターに雇われた牧師は奴隷主に都合の良い部分だけ選んで説教していたのである。

黒人奴隷の抵抗は奴隷化された時から始まり、植民地時代のヴァージニアでもしばしば発生した。その為1705年にはアフリカ人を再捕虜する方法が法律化された。一方、南北戦争以前の合衆国北部においては、南部奴隷の逃亡を支援する「地下鉄道」という秘密組織が形成され、活動したことが有名である。奴隷制廃止主義者の手引きで旅客（逃亡奴隷）を秘密の宿泊所に次々とリレーし、カナダ方面に送り出したといわれている。又、奴隷解放運動が前進しつつあった19世紀初期の大規模な奴隷反乱は白人社会を恐怖に陥れた。この反乱の特徴は、キリスト教宣教師達が奴隷居住区で活動したこと、奴隷の代弁者となった黒人の説教者達が運動に加わり、

聖書に基づいて運動が急進的に進められたことであった。

4. フロンティアの「ヨーロッパ化」とアメリカの歴史観

新大陸アメリカの発見と征服、植民と開拓は中世キリスト教の「開かれた伝道」と「聖戦」の名において非キリスト教空間の道徳的、宗教的変容を強制的に拡張してきたフロンティアの「ヨーロッパ化」の一連の宗教的情熱に位置付けることができ、その淵源を北の十字軍に見ることができる⁽¹¹⁾。それは罪の意識ではなく、むしろ確信を持って異教の先住民を殺害し、時には種族を根絶してきた延長線上に、このアメリカへの植民も、奴隷制も位置付けられると言える。そして理念と軍事力の後ろ盾をアングロサクソンの大英帝国帰属に求めたのではないか。南北アメリカにおける奴隷制は西洋近代が作り出したという資本主義世界システムの視点から考えられる。15、16世紀に形成された大西洋システム⁽¹²⁾は新大陸の植民、開発の進展や大西洋奴隷貿易によって多角的通商を展開させつつ、18世紀中頃に完成したといわれている。それはスペイン、ポルトガルのアメリカ大陸の征服、略奪に始まり⁽¹³⁾、オランダについてイギリスが最初の資本主義世界経済システムの「中枢」国となり、ついで覇権国家となる過程でプランテーション奴隷制として完成した。このように新興諸国が弱い箇所へ挑戦を開始し、新大陸は征服されていったのである。

次に、デヴィット・W・ノーブル（目白アメリカ研究会訳）の『アメリカ史像の探求』（1988）によって、アメリカの歴史家とそれを支えた国民がアメリカ史をどのように構成してきたのか概観することを通じて、ピューリタンのアメリカの歴史に対する考え方を浮き彫りにして見たい。パーコヴィッチによると、プロテスタントは新、旧二つの世界⁽¹⁴⁾を想像し、旧世界から解放されて、新世界へ脱出することは可能と考えた。ピューリタンの神学におけるこの比喩が宗教と切り離され、18世紀初めのイギリス植民地で広く受け入れられた。そして、すべてのプロテスタントは誰でも「選民」⁽¹⁵⁾としてニューイングランドばかりでなく北アメリカ全体を「約束の地」として神から与えられたと考えた。この時、「ピューリタンの嘆き」は「アメリカの嘆き」⁽¹⁶⁾となった。

そして、アメリカ史全体を通じるようなアイロニー⁽¹⁷⁾でアメリカを解釈したのは1970年代のパーコヴィッチ、ポコック等であった。パーコヴィッチによればアメリカの歴史家たちがアメリカの文化的独立を説明するのに用いた「旧世界」「新世界」の見方はヨーロッパの宗教改革の所産であるとして、更にパーコヴィッチの述べた「アメリカの嘆き」⁽¹⁸⁾というレトリックが、ジョージ・バンクロフト等19世紀の歴史家の場合と同様、ターナーやピアードにおいても叙述の枠組みをなした。又、その大部分は「約束」の原理によっては生きられなかったという墮落を表す経験ばかりであった。そこで彼等が期待したのは自分達が預言者となり、「約束」がいつ、どのように成就するかを預言し（約束、墮落、預言と続く）レトリックを完結させることであった。例えば、西部開発は次のように考えられた。西へ漸進しながら「明白な天命」⁽¹⁹⁾を実現していくアメリカにとっては、もう一人のモーセの指導者が必要となり、墮落した状況を自覚させ、将来「約束」を果たすように彼等を導いたのはエイブラハム・リンカーンであるとされ、西部は約束の成就と深く関わっていた。

又、産業主義、資本主義、民主主義については次のように考えられていた。ピアードは資本主義と民主主義を比較し、より高度な発展段階は民主主義であると断じ⁽²⁰⁾、民主主義がやがて世界中に広まって、啓蒙主義と産業主義の「約束」も世界中で実現されるだろうと預言⁽²¹⁾した

がアメリカ独立革命に関しては何も神聖なものは見出さなかった。更に、ピアードは⁽²²⁾「中世の暗黒から脱却し資本主義の避けがたい苦しみを経て、産業主義という「約束の地」へと人類が進んで行く社会進化の普遍的パターンに対して合衆国が持つ独特な関係を解明する。」とした。またピアードは⁽²³⁾「セオドア・ローズヴェルトの中にモーセ的指導力を見出し、ローズヴェルトがアメリカ国民を資本主義の「墮落」から産業民主主義の「約束の地」へと導いてくれるだろう」と信じていた。この様にレトリックは繰り返されて行った。

続いてもう一つ事例を見てみたい。第二次世界大戦後のアメリカの地方分権は次のように考えられた。1950年代、60年代を通じアメリカの産業は発展し、「豊かな社会」と言われた。しかし、この生活水準の向上はアメリカを「帝国」⁽²⁴⁾とし、ソ連との軍拡競争という結果を生み出した。そして、アメリカ国内でも国際的にも中央集権化が進んだため、国の内外で混乱が生じた。この様な墮落に代わる道を示してくれる「約束」、預言は地方分権化されたコミュニティであった。このようにピアードのレトリックは脈々と息づいているのである。そしてこのようなピューリタンの思考はアメリカ人の間にいまだに根強く残っており、国民的危機の度に「嘆き」の現象が起こり「約束」という原点に帰れと促す⁽²⁵⁾。このピューリタン特有の現象は旧約聖書の預言者エレミア⁽²⁶⁾の哀歌になぞらえ、「エレミアの嘆き」と呼ばれており、「嘆き」の声は悔悛するなら「約束」は必ずアメリカに実現すると「預言」され、アメリカの歴史は独特なレトリックによって解釈されてきたのである。

II. 18、19世紀の米国社会状況の特徴

1. 社会的、経済的状況

南北戦争と再建に至るまでの18、19世紀のアメリカは、人々の生活面、意識面、精神面でもダイナミックな変容を遂げた時代だった。そして彼等は、アメリカ革命によって150年の間にヨーロッパから継承してきた諸制度や生活習慣を変容させ、連邦共和制という新社会を作り出した。1787年の独立戦争以来、合衆国憲法を巡る対立が弱まり、国内には楽観的な気分がみなぎり、私的利益の追求を認める風潮や平等主義の思想が台頭した。18世紀には本国との交流が進み、啓蒙思想や科学的知識が植民地に取り入れられた。都市⁽²⁷⁾を中心に新聞が幾つも出されるようになり、人々の間に情報や知的欲望が増大した。19世紀半ばにアメリカは世界最大の農業国、19世紀末には世界最大の工業国となったように、農本主義的価値観に代わる産業主義価値観が優勢になっていた。1812年に起きた第二次米英戦争を機に、急激な産業化によって農本的な独立小生産者の社会が都市を中心として資本と賃労働関係を原理とする社会に変容するようになったのである。

産業化と技術革命によってアメリカ社会は先例のない発展を遂げ、人々は新しいアメリカを望んでいった。その後シカゴは second city となり、技術革命が加速する一方で、旧東部の貴族的な権力とニューイングランドの支配力が文化面において弱まりつつあった。福音主義的運動や奴隷制廃止運動が起きる中、文化面においてはイギリスのヴィクトリア文化⁽²⁸⁾と共通な面があった。旧移民と呼ばれるヨーロッパからの大量移民が押し寄せ、言語や習慣、価値観や文化の違う住民が急増して社会変動を更に複雑にしていた時代であった。つまり、宗教的信念をはじめ、経済的利害や労働観、人種思想が絡み合っていた時代であった。

2. 宗教と啓蒙思想

アメリカはその植民地者が信仰の自由、理想の国を築く為にイギリスから逃れ、「選ばれし選民」としてピューリタン精神に基づく宗教的動機と原理によって構成されてきた。従って、宗教と政治との結び付きが初めから強かったが、そのピューリタン精神は、プロテスタントイズムに基づく勤勉を重視することによって生活が豊かになり、成功と徳こそが神の選択であるという世俗主義的傾向となっていた。貧困者、怠惰な者、そして無能な者は神の裁きによって排除しなければならないと人々の意識は転化していった。一方で、奴隷制に関する運動は北部の植民地で奴隷制反対の感情が俄かに強まり高まっていった。

このような変化の原因の一つとして、啓蒙思想の影響が考えられる。17世紀のイギリスは、イギリスの教会や国教会の衰退と産業革命による貧富の差から、不安、不道徳、非宗教的な風潮であった。イギリスの啓蒙思想の特徴は、人間の理性に基づいた真理と神とどう調和するかということ、もう一つは神からの発想ではなく、下からの、即ち人間からの発想であるから無神論的であるということが挙げられる⁽²⁹⁾。植民地社会が成熟するにつれ、多くのヨーロッパ人は人間と世界についての古い考えを持ったキリスト教の代わりに合理主義的考えを支持し始めた。啓蒙思想は、神の啓示ではなく人間の理性によって普通の自然法を発見できるという考えである。そして、人々は自然の働きを合理的に判断でき、自分と社会を改善できると考えたのである。例えば、独立革命の機運を高めたのも啓蒙思想の影響が強かった⁽³⁰⁾。古い慣習に対して論理的思考が発展し、奴隷制度をキリスト教が是認していることへの疑念があった。この疑念から、植民地人が黒人の自由を奪って奴隷制を認めることは人々の反感を買っていったのである。つまり彼等は奴隷制に対する罪の意識を持っていたのである。啓蒙思想の合理的な考えに基づき黒人奴隷開放運動に携わったアボリショニスト⁽³¹⁾、及び白人達は、奴隷制を正当化する古い観念は封建制度の遺風であると考えた為に奴隷制反対につながった、という見方になる。

しかし、私は啓蒙思想や道徳的、信仰的動機だけで奴隷制廃止につながったとは思わない。先にも述べた様に、当時は啓蒙思想の影響によって神への信仰よりも理性において自然を理解する理神論的風潮であった。後に述べる南北戦争後、人々の間では進歩、文明を掲げる一方で倫理観が薄れていった。それは西部開発によって信仰が薄れる傾向になったこともあげられる。なぜなら、初期における教会の役割は純粋性を保ち社会の模範として全体をコントロールする存在であったが、西部開発で教会から離れるようになってから信仰が弱まる傾向になったからである⁽³²⁾。このようにして宗教的禁欲よりも勤勉によって道徳的墮落を防ぐようになり、奴隷制廃止へと向かうが、奴隷制度の進展過程に於いて労働を巡る自由思想が深く関わってきたのではないかと考えられる。

III. 南北戦争の契機と諸思想

1. 南北戦争期の社会状況

南北戦争は61万8千人という膨大な戦死者を出した「骨肉の争い」であった。まず当時の南部社会を述べる。南部社会は奴隷所有者であるプランターと奴隷との関係を基本とする社会であった。アメリカ革命⁽³³⁾によってイギリス重商主義体制との結び付きを失った南部のプランテーションはイギリス綿業資本と結び付き、綿花栽培に活路を見出した。南部奴隷制プランテーションはイギリス産業革命と表裏一体の関係にあっただけでなくアメリカ経済の発展においても決定的重要性を持っていた。アメリカは工業部門の輸出を超える輸入分を綿花輸出で決済し、綿

花は国内的にも国民経済の原動力となったのである。又、南部は奴隷制度を前提とする生まれながらの特権と階級的、人種差別という疑似貴族制社会であった。アメリカ革命前後の時代では啓蒙思想がはやり、「全ての人間は平等である」という思想の下に、北部、西部、南部で奴隷制廃止運動が盛んであった。ところが、綿花栽培により大量の労働者を必要とした南部は奴隷制度を拡大し、奴隷制廃止運動が強まった北部の攻撃を受ける一方で、奴隷制擁護論を唱えたのであった⁽³⁴⁾。

一方北部は、人は皆平等であるという自然権思想のブルジョア的自由を持つ社会であった。北部の鉄道などの交通網を拡大していったことに加え、急激な工業発展は膨大な労働人口の増加をもたらし、産業化する西部の食糧への需要を生み出していった⁽³⁵⁾。アメリカ経済は綿花への全面的な依存から解放されたことを意味する。更に北部と西部のこのような価値の共有が南部の経済に打撃を与えた。先に述べたように、北部と対立を激化させた南部人の奴隷制擁護論の問題と、西部の新領地に奴隷制を認めるか否かという問題は南北対立の要因となった。1854年のカンザス・ネブラスカ法案⁽³⁶⁾によるミズーリ協定を否定し、更に黒人の引き起こしたハーパーズ・フェリーの襲撃は南北を決定的に引き裂いた。1861年に南北戦争は勃発し、1865年に北部が勝利を得た。戦後、北部（北東部）は急激に工業化、都市化を進め、戦場となった南部では経済的被害を被り、依然として農業が比重を占めていた。

2. 奴隷制と労働思想の関係

近代に至るまでの労働は古代ギリシャにおける生活の必要物の生産に関わる営みとして考えられてきたが、やがて人間生活の条件から労働を取り除こうとする労働観が支配的となった。なぜなら労働は自由な市民にとって束縛された奴隷の活動であると考えられたためである。アメリカ革命期のベンジャミン・フランクリン⁽³⁷⁾によれば、労働は人間の尊厳ある「勤勉」と「独立心」を徹底的に賞賛されるべき行為とされ、宗教倫理実践というよりも働くことが道徳的实践だという功利主義⁽³⁸⁾に基づいていた。共和主義の精神はやがて近代的労働イデオロギーの台頭に対し存在理由を明確にできず、独立自尊と徳という規範は失われる。つまり産業化の発展に伴ない、労働の均衡化が進み、社会はしだいに功利主義的になっていった。つまり独立自営の精神が世俗化し、勤労のイデオロギーへと転換したことを意味する。従って、古代に於ける奴隷の営み、即ち自由は労働する以外の時に解放される、ということから近代においては、労働が自由を手に入れられる、という傾向に変わったのである。一方で、キリスト教は文明、進歩という意味で用いられるようになり、このような宗教上の無関心に対し、信仰復興が叫ばれた。

では、白人、黒人にとっての自由とはどのように考えられていたのか。南北戦争後、勝利を手に入れ、進歩と所有欲を持った北部の白人達は解放民に労働させることは自由を与えることである、という労働観を持つ様になった。つまり彼等は黒人は労働することによって自由を自らのものにすることができる、逆にいえば労働を回避できない不自由を与えようとした。やがて、「富の源泉としての労働」という風潮が高揚し、労働は奴隷だけでなく市民全体の責任であると考えられた。このように制度としての奴隷制は要らなくなり、奴隷制廃止へと移行するのであった。

しかし、前述したように、自由への労働は、「必要」な労働から解放しないことを意味し、奴隷解放後は、黒人たちが予想通りに働くかが懸念された。その防御として北部のキリスト教

は解放民が労働へ自発的に参加できるように労働倫理と礼儀作法、慎ましさを教え、白人への献身的態度を身に付けさせた。このようにして労働は人間の自立と自由を実現化するものへと形作られていった。社会全体で自由労働が承認されると、労働のための黒人が南部に必要であった。なぜなら白人労働者に加え、自由な黒人に労働を強制して行くことが、当時のプランターや労働者に利益をもたらすとする自由労働イデオロギー⁽³⁹⁾に適うからであった。このことは黒人が一時的ではなく永久に労働者として定着し、そして労働思想が道徳を覆いかぶす形となった。又、自発的な労働から自活が目標とされ、解放民は40エーカーの土地と一匹のヤギを手にするを約束されたが実際はできなかった。しかし労働者の意欲を高揚させるために報酬賃金を出すことにより、地主と労働者の関係は強くなっていった。この関係は兩人種アングロサクソンとアフリカを神の摂理によって仕切らなければならないことを示した。それは白人が、黒人を働かせることは黒人を死滅から守るためだとして白人に選択権が備わっているとする自然権に基づくものであった。

3. 南部、北部の奴隷制に対する労働思想

次に南部と北部の奴隷制に対する労働思想に焦点を当てて考察してみたい。前述したように、南部では第二次米英戦争を迎えると北部産業と南部の綿花需要の増大による奴隷制プランテーションの農業が支配的となり、一方北部では自由労働に基づく産業の発展が支配的であった。アレクシス・ドゥ・トクヴィルの「アメリカの民主主義」によると、奴隷州では「労働は奴隷制の観念と結び付いている」ために軽視されているが、自由州では「労働は福祉と進歩の観念と結び付き、そこで労働が尊重されている」と記されている⁽⁴⁰⁾。つまり、南北において労働に対する評価が正反対であり、北部には労働が富と物質的豊かさという幸福を得るための手段、即ち一種の拝金主義⁽⁴¹⁾が存在していたのである。対極にある奴隷州では労働は奴隷を連想させ、奴隷の義務であることと同義となり、このようにしてフランクリンの時代から南部と北部には労働観に対立的な相違があった。そのため、北部では奴隷を持たなかったので自ら労働しなければならず、労働とその費用を必要とした。一方、南部では奴隷を用いたために労働に報酬を払わずに済み、そこには閑暇と節約があった。従って、労働思想と奴隷制が深く関わりあっていたことが指摘できる。更に、奴隷には自由人よりも経費がかかり、奴隷の労働は生産性においても劣っていると指摘された。北部における産業の発展は南北の経済格差を拡大し、特に北部では船舶、製造業、鉄道、運河などが集中し発展を極めていった。南北でこのような労働文化の違い、即ち労働の尊厳対労働の軽視が南北の経済力格差の大きな原因となって現れ、奴隷制の存否にも関わっていたのである。このようにして、奴隷制は単に道徳のみで否定されるべき存在ではなく、営利上でも否定されるべき制度と化したのである。従って、奴隷制反対運動も勤勉と独立自営を尊ぶ社会層によっても推進されたと考えられる⁽⁴²⁾。

IV. 奴隷制と宗教的、思想的関係

1. キリスト教と奴隷制擁護論の関わり

白人にとっての黒人のイメージは植民初期、即ち自由の身であった時期においては「怠惰、無秩序、貧乏」であり、終生奴隷とされる様になってからは「不道徳、無能で自由を活用できない」ものとして定着した。しかし、18世紀末の啓蒙思想の時代においては、黒人の劣等性は環境に起因するものであるとする環境主義の考えに基づいていた⁽⁴³⁾。多くの良心的な白人の教

養人を奴隷制廃止の方へ向かわせるが、自由黒人という新たな身分により、できたての共和社会秩序が破壊されるという危機感があった⁽⁴⁴⁾。白人は1861年のアメリカ植民地協会設立に伴い、彼等を西アフリカに送り出すことによって白人の持っている恐怖を減らそうと考えた。即ち植民地協会は奴隷制廃止と自由黒人に対する白人の恐怖の除去、そしてアフリカの文明化を推進することを同時に達成しようとした。

ここで、キリスト教がなぜ奴隷制を正当化したのかを前述した奴隷制擁護論と交えながら考察してみたい。ジョージ・ベストは旧約聖書⁽⁴⁵⁾や新約聖書によって奴隷制を是認する立場をとり、エドワード・ロングはアフリカ人種の劣等性、白人の優越性を進化論的⁽⁴⁶⁾に考える立場を取っている。前者はノアの神の呪いという宗教によって、後者は科学と「理性的」神によってアフリカを永遠に断罪し、奴隷の正当化を位置付けたのである。更にキリスト教が奴隷の存在を正当化してきた要因の一つは、既に前述のアウグスティヌスやトマス・アキナス等による奴隷制擁護論が19世紀までアメリカにおいて維持されてきた、ということが挙げられる。

18世紀のアメリカで信仰復興運動⁽⁴⁷⁾が起きると、複雑な教義を受け入れなかったアフリカ人は、簡素な礼拝体系を導入し、自由な感情表現を容認したバプテスト、メソジスト派⁽⁴⁸⁾によって読み書きを習う⁽⁴⁹⁾と同時に黒人専用の独自のキリスト教を形成していった。しかし、19世紀の30年代に南部で綿花王国が急激に発展し、奴隷暴動や黒人アポリショニスト等による奴隷制反対運動が発生すると、バプテスト、メソジスト派等は過度な奴隷制擁護論を唱えていったのである⁽⁵⁰⁾。なぜなら、「奴隷所有の権利は聖書の中にはっきりと示されている。」と考えたからである。J. S. ミルによれば、「キリスト教道徳は反動の持っているいっさいの特徴を持っている。(中略)その理想は積極的というよりもむしろ受動的である。すなわち、高貴であることよりも罪なき存在であることを尊び、積極的に善を追求することよりも悪から離れていることを尊ぶ。」と本来持つべき宗教的役割の欠如を指摘している。このことは、メソジスト、バプテストを初めとする教会が社会的影響力を行使できたにもかかわらず、奴隷制に断固とした態度をとれなかったことを意味するのではないか。その後、メソジスト、バプテストなどの宗派に代わって、「生まれながらの平等」を掲げる奴隷制反対協会が奴隷制に反対を行った。

当時のプランテーション、運河の通商、ヨーロッパの大量移民など産業化してゆくアメリカ社会からわかるように、「伝統的な生活」を規範とする植民初期に戻すことは不可能であったと考えられる。このことから、宗教と功利的合理主義の世界は親和的であったということができる。奴隷制反対運動においては人間の自由意志を強調する福音主義が支えとなり、世界を完成させようという神の意志を实践するものと考えられた。人間は自由な存在であるため、自由を否定する奴隷制に対して反対しなければならない⁽⁵¹⁾。つまり、自由、進歩を達成するには奴隷制を排除しなければならなかった、ということになる。

2. 奴隷制廃止後の社会状況

このような奴隷制撤廃に向けた宗教的運動も、思想的運動もこれまでみてきたように、資本主義の労働思想の前に色あせていった。しかし、包括的な社会運動として、奴隷制はついに廃止されていく。そして、奴隷制が廃止され、奴隷が解放されていく一方で益々産業が発展し資本主義が確立すると、白人の低賃金労働者も増加し、選ばれたはずの白人と有色人種との関係が社会問題として挙げられる。どのようにして社会が安定したのか。奴隷から解放された黒人をトイレの使用やバスの利用など、日常生活の全般に渡って区別する人種差別いわゆるジム・

クロー制度⁶²⁾はこのような社会的背景から発生し、奴隷解放からかなりの年月の後、19世紀から20世紀初頭にかけて成立して行く。それは、一定期間の社会安定化と対立の歴史であった。現在においても、『ニューズウィーク』誌(1992年5月28日)によると、アフリカ、アジア、中国、米国などで数千万人の女性、幼児を含む子供が奴隷となっていると報告されている。1924年に国際連盟が国際奴隷制協約を締結し、奴隷の売買、強制労働廃止が打ち出され、1948年には国際連合が世界人権宣言で、それらを禁止している。にもかかわらず、現在世界には2億人の奴隷がいると報告されている⁶³⁾。法律が制定されていても奴隷、差別、偏見は残っているのである。

おわりに

以上考察してきたように、アメリカの奴隷制と深く関わってきた思想は主に三つあると考えられる。一つは、中世ヨーロッパにおける奴隷制擁護論がアメリカで19世紀まで継承されてきたこと、二つ目は理性で神を知るという啓蒙思想が無神論的要素を持っていたこと、三つ目は自由労働イデオロギーが独立自尊という共和国建設に重要であるために、功利思想が高まった、ということである。このような流れの背景から、奴隷制は精神文化、物質文化のどちらにおいても進歩を拒み、経済が停滞するものと考えられた。又、奴隷制反対運動は進歩イコール自由という図式を持つ功利思想の文脈の中で把握できるものであった。故に、奴隷制を廃止させた思想運動を考える上で留意すべき点は、自然権思想や、信仰心の面からのみ解釈するのではなく、功利主義的な面からも解釈することが大事だと私は改めてわかった。最初の植民者達は皆、善良なる市民であった。旧大陸の棄民という側面もあった。しかしそれだけでなく、ピューリタンとして理念の社会を作るために、神から選ばれし民となり、「善の新大陸アメリカ」に導かれたと彼等は考える。彼等の神に導かれた営為が罪の意識でなく、確信を持った宗教的情熱となるにはフロンティアをヨーロッパ化するという中世キリスト教の開かれた伝道と聖戦の原理、即ち我と他者を常に二重に規定する原理主義的規定を必要とした。そこには西田幾多郎の言葉を使えば、純粹経験、自覚、場所もない⁶⁴⁾。更に、人類の世界史において、正義の戦争とは理論的には存在し得なかったにもかかわらず、聖戦の名において戦争が正当化されてきた。歴史的には力の前に勝敗が決していただけであったと言える。しかし、彼等は世界システムの中で本当に何の疑いもなく情熱的に、かつ確信を持って生きていたのである。又、このピューリタンの特徴「約束」「墮落」「嘆き」「預言」の社会的連鎖が現代にも根強く息づいている。

17世紀に世界で奴隷制を採用した諸国の中にあって最も突出して奴隷制を系統的に完備したのはアメリカであった。そして農業、工業いずれにおいても生産力革命の結果、産業は発展し生産力の増大から、その労働力として黒人奴隷を大いに必要としたのであった。そして奴隷制は永久に続くかのようであった。同時に、移民の流入も後を絶たなかった。当時のニューヨーク市の人口を見ればその後の膨張がいかに大きかったか推測できると思う。又、奴隷制度は本稿で見てきたように精神文化と物質文化の緊張関係の中で形成され、その緊張関係の中で物質文化の力がより勝って奴隷制廃止に至ったと考えられる。繰り返しとなるが、現代でも奴隷や人種差別の存在が報告されている。この現実も、精神文化と物質文化の緊張関係という構図で理解することができると考えられる。今回の考察で改めて、それぞれの歴史がいかに重く現代にのしかかっているのかを認識することができた。

註

- (1) 聖書の中に書いてある物語を正当化することが中世ヨーロッパにおいて共通の認識であった。アメリカにおいても、奴隷主をあたかも神に仕えられた者の様に賛美していたのであった。池本幸三、布留川正博、下山晃、『近代世界と奴隷制』人文書院、1999年、240～250頁。
- (2) これはウィリアム・テーゼによる見解である。池本、布留川、下山、前掲書、313頁。
- (3) 山内進、『掠奪の法観念史』東京大学出版会、1996年、67頁。
- (4) 19世紀、ドイツの歴史家ゲオルグ・ヴァイツが訳したもの。山内、前掲書、64頁。
- (5) 山内、前掲書、76頁。
- (6) 小田垣雅也『キリスト教の歴史』講談社学術文庫、1999年、187頁。
- (7) 湿気の多い船の中で清潔に保つことと焼印を見やすくするため。池本、布留川、下山、前掲書、236頁。
- (8) 家父長的温情主義によって、1660年の奴隷法、1717年の奉公人法を経て、1740年には奴隷主は奴隷に十分な衣料と毛布を与えなければならないと規定される。池本、布留川、下山、前掲書、238頁。
- (9) 池本、布留川、下山、前掲書、239頁。
- (10) 奴隷制反対論者の援助で設立された様々な教育施設においても学んだ。池本、布留川、下山、前掲書、246頁。
- (11) 山内進、『北の十字軍』講談社、1998年、序文5～21頁。
- (12) 「中樞」国の商人資本がカリブ海や南北アメリカで奴隷労働を用いて砂糖、タバコ、綿花などを生産するために大農場経営を行った。その大農場経営が資本、交易などを通じ、大西洋を挟んで直接、間接に結び付けられた経済循環のシステムのことをいう。池本、布留川、下山、前掲書、19、311頁。
- (13) 池本、布留川、下山、前掲書、20頁。
- (14) 彼はヨーロッパの抑圧的な社会である「旧世界」から神の国をめざす自由なアメリカ「約束の地」即ち「新世界」へ脱出したと考えた。デビッド・W・ノーブル、『アメリカ史像の探求』有斐閣選書（目白アメリカ研究会訳）、1988年、8頁。
- (15) デビッド・W・ノーブル、前掲書、8頁。
- (16) 「約束、墮落、預言」はイギリスからニューイングランドに持ち込まれた。同書、8頁。
- (17) 同書、14頁。
- (18) 同書、16頁。
- (19) 同書、32頁。
- (20) 資本主義と民主主義を比較しながら民主主義の方がより高度な発展段階を示しているの、資本家の財産所有には正当な権利を主張する権利がないと論じている。同書、58頁。
- (21) 同書、61頁。
- (22) 同書、64頁。
- (23) 同書、68頁。
- (24) 同書、285頁。
- (25) 同書、315頁。
- (26) 同書、314頁、及び雨宮慧『旧約聖書の預言者たち』NHKライブラリー、1997年、11～18、135～188頁。
- (27) 例えばフィラデルフィアは、植民地の上層階級と庶民の意識を併せ持つ文化の中心地であった。有賀、大下尚一『概説アメリカ史（新版）』有斐閣選書、1999年、36頁。
- (28) ヴィクトリア文化はイギリス産業革命の時代の文化で、勤勉、抑制等の倫理を基に産業主義の社会で社会的責任感、個人の道徳の厳格さを持っていた。有賀、大下、前掲書、266頁。
- (29) 小田垣、前掲書、168頁。

- (30) トマス・ジェファソンをはじめとする啓蒙思想が同時に建国の基本的理念であった。独立宣言や連邦憲法に表された政治哲学、社会哲学は啓蒙思想の文化の中で発展した。有賀、大下、前掲書、266頁。
- (31) 18～19世紀初頭、彼等（奴隷制廃止論者）は自然の法（神の法）ないし道徳的法哲学の立場という独立宣言を維持する立場によって支えられていた。シンシナティのL. コッフィンやデラウェアのT. ガーレットは南北戦争以前の北部で「地下鉄道」に献身的に協力した。辻内、前掲書、42頁、及び池本、布留川、下山、前掲書、253頁。
- (32) 森孝一『アメリカと宗教』日本国際問題研究所、1999年、52頁。
- (33) アメリカ革命で13植民地がイギリスから独立し、新国家としてのナショナリズムを強め、南部の利益擁護よりもアメリカ全体の利益を優先にしていた。有賀、大下、前掲書、194頁。
- (34) 1820年から40年間にわたる奴隷制度が続いた。（補記）
- (35) 北部の膨大な食糧需要と大量の西部移住は、西部を商業的農業地域、ブルジョアの価値観に裏付けられた中小ブルジョア農民の社会へと変貌させた。有賀、大下、前掲書、89頁。
- (36) 36度30分以北に位置するカンザス州を奴隷州に明け渡す可能性を開いた。有賀、大下、前掲書、92頁。
- (37) フランクリンは1730年代に13の徳を定式化し、『富に至る道』（1757）を書いた。「幸福」と「富」へのいわばチケットだった「勤勉」と「独立」は実践的な道徳として一部の階層に代表される思想であった。辻内鏡人、『アメリカの奴隷制度と自由主義』東京大学出版会、1997年、68～79頁。
- (38) フランクリンの道徳的訓戒は功利的傾向であった。マックス・ヴェーバー『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』（梶山力訳、未来社）、1998年、94～101頁。
- (39) 労働を尊厳ある営為と見なす北部の白人中産階級の理念。辻内、前掲書、135頁。
- (40) 同書、82頁。
- (41) 同書、83頁。
- (42) 同書、86頁。
- (43) 同書、37頁。
- (44) 辻内、前掲書、37頁。
- (45) 旧約聖書の洪水物語に出てくるノアの息子チャムが、父の命令に背いてチャスを設けた為、チャムの子孫は黒く汚れてしまった。そして、このチャスから黒いムーア人が生まれた。その後、チャム一族にはアフリカが与えられた。池本、布留川、下山、前掲書、35頁。
- (46) 猿に近いアフリカ人から白人に至ることにより、純白の最高の完成進化段階に到達するという考え。池本、布留川、下山、前掲書、36頁。
- (47) ジョナサン・エドワーズが率いる第一次信仰復興はニューイングランド、ヴァージニアを中心に広まった。カルヴァン主義（神の救いは初めから予定されている人だけ選ばれる）に基づき、啓蒙主義的合理主義や自由主義を否定した。第二次信仰復興はミドルクラスを中心に常に自由の達成度によって計られる進歩が最も尊ばれる価値であった。カルヴァン主義からアルミニウス主義（救いは万人に備えられている。）へと転換し、意志の自由が強調された。小田垣、前掲書、187～189頁。
- (48) アルミニウス主義に基づいて個人の自由意志を認めていた。池本、布留川、下山、前掲書、249頁。
- (49) 白人は、いかにして黒人が奴隷主に対して礼儀正しくできるかということ教えるのが目的だった。（補記）
- (50) 18世紀の80年代から奴隷制に反対していた。池本、布留川、下山、前掲書、249頁。
- (51) 辻内、前掲書、45頁。
- (52) C. V. ウッドワード『アメリカ人種差別の歴史』（清水博、長田豊富、有賀貞訳、福村出版）、

1998年、4～5、12～14、30～40頁。

(53) 池本、布留川、下山、前掲書、325頁。

(54) 人、万物を含む全宇宙は、純粹経験、自覚、場所へと転換するプロセスを経て常に発展するという考え方。(補記)

参考文献

池本幸三・布留川正博・下山晃『近代世界と奴隷制』人文書院、1999年。

山内進『掠奪の法観念史』東京大学出版会、1996年。

小田垣雅也『キリスト教の歴史』講談社学術文庫、1999年。

山内進『北の十字軍』講談社、1998年。

デヴィット・W・ノーブル『アメリカ史像の探求』目白アメリカ研究会訳、有斐閣、1998年。

雨宮慧『旧約聖書の預言者たち』NHKライブラリー、1997年。

有賀貞・大下尚一『概説アメリカ史(新版)』有斐閣選書、1999年。

森孝一『アメリカと宗教』(叻)日本国際問題研究所、1999年。

辻内鏡人『アメリカの奴隷制度と自由主義』東京大学出版会、1997年。

マックス・ヴァーバー『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』梶山力訳、未来社、1998年。

猿谷要『歴史物語アフリカ系アメリカ人』朝日選書、2000年。

ハロラン美美子『アメリカ精神の源』中央公論社、1998年。

A. トクヴィル『アメリカの民主政治(上)』井伊玄太郎訳、講談社学術文庫、1998年。

C. V. ウッドワード『アメリカ人種差別の歴史』清水博、長田豊富、有賀貞訳、福村出版、1998年。

(英米文学演習 I 論文指導教員 松崎洋子)

表1 奴隷制合法化の年代

1641年	マサチューセッツ	(北部)
1650年	コネチカット	(北部)
1652年	ロードアイランド	(北部)
1661年	ヴァージニア	(南部)
1665年	ニューヨーク	(中部)
1682年	サウスカロライナ	(南部)
1714年	ニューハンプシャー	(北部)
1715年	ノースカロライナ	(南部)
1721年	デラウェア	(中部)
1749年	ジョージア	(南部)

表2 植民地の推定人口 (単位は1,000人)

	1650年	1700年	1750年
ニューハンプシャー	1.3	5.0	27.5
マサチューセッツ	15.6	55.9	188.0
ロードアイランド	0.8	5.9	33.2
コネチカット	4.1	26.0	111.3
ニューヨーク	4.1	19.1	76.7
ニュージャージー		14.0	71.4
ペンシルヴァニア		18.0	119.7
デラウェア	0.2	2.5	28.7
メアリランド	4.5	29.5	141.1
ヴァージニア	18.7	58.6	231.0
ノースカロライナ		10.7	73.0
サウスカロライナ		5.7	64.0
ジョージア			5.2

『歴史物語アフリカ系アメリカ人』より